

# 浮舟の死は周圍に理解されたか

——蜻蛉の巻後半についての一考察

蜻蛉の巻は巻初から浮舟の四十九日の法要までの前半とその以後の後半との二部に分れる。前半の物語の運びは、妻争説話の枠の中で構想され、女の死後、あとに残された者達の心理・行動として、浮舟の側近女房・乳母・母親・養父・匂宮薫等の驚愕・画策・悲嘆・猜疑等を、現実的に当代風に組立てたものである。私はさらに、後半のいわゆる宮廷的恋愛のくだりも、やはり妻争説話中の求婚者達の直情的な行動を構想の基底に持って、日常生活に戻っている薫と匂宮のあり様を、素樸な彼等とは全く対比的な別世界に構築したと解釈するものである。また、この部分には細部に亘って浮舟の巻との対応が見出される。私には、この蜻蛉の巻後半にこそ、浮舟の巻を完成するものが書かれていると思われる。

また、蜻蛉の巻後半では、薫が物語の中核を占めている。手許にある日本古典文学全集「源氏物語」の見出しは次の如くなっている。

## 久保重

- 薫、小宰相の君と想いをかわす
- 中宮の御八講、薫女一の宮をかいま見る
- 薫、女一の宮と女二の宮とを比較して嘆く
- 薫、女一の宮を慕って中宮のもとにまいる
- 中宮、浮舟入水の真相を聞き驚愕する
- 薫の女一の宮思慕と、わが半生の回顧
- 匂宮、侍従を呼んで語らう 侍従中宮に出仕
- 宮の君、女一の宮に出仕 匂宮、懸想する
- 六条院の秋、薫、女房らと戯れる
- 薫、女房らへの感想につけて中の君を偲ぶ
- 薫、女一の宮を想いつつわが宿世を思う
- 薫、宮の君を訪い、世間の無常を思う
- 薫、宇治のゆかりを回想しわが人生を詠嘆

右に見る様に話題の焦点となっているのは殆どが薫で、小宰相・女一の宮・女二の宮・女一の宮付きの女房達・宮の君・故八の宮の姫達・浮舟等登場人物は、薫の視点から、もしくは想念において取り上げられている。と云うことは、このくだりに、浮舟入水後日譚とは別に、薫その人を主題とする一面が、並行的に存在することを示すものである。すなわち、蜻蛉の巻後半の宮廷的恋愛の部分は、具体的なもの、非具体的な性質のものとの二つの主題を同時に持つ特異な構造を有すると云えるものであるが、本稿では専ら前者すなわち、浮舟入水後日譚の面を取り扱うこととした。

妻争説話には、をとめの死に遭った求婚者達のとった行動に、もう一つのポイントがある。浮舟入水の原拠と目される「大和物語」百四十七段では、うばら男もちぬ男も、女が生田川に身を投じると、忽ち、争って後を追った。「このよばふ男ふたり、やがておなじ所におち入りぬ。ひとり足をとらへ、いまひとり手をとらへて死にけり。」(日本古典文学全集)とある。をとめが二人の男に命を捧げたのに対して、求婚者達も死をもって応えた。これに反して匂宮と薫は、浮舟の四十九日が過ぎると、日常の生活に立ち戻ってしまった。蜻蛉巻後半には浮舟の知らなかった世界、浮舟の巻には書き残されていた彼等の本来の生活状態——摂関制下の皇后里邸生活を背景に、皇子匂宮と若き最高貴族薫との、宮廷的恋愛に明け暮れる日々がくりひろげられている。彼等にとって、浮舟は、またその死は、一体何であったのか。作者はそれを問おうとするようである。

まず浮舟の入水の顛末から見よう。

明石中宮の耳に、女一の宮の女房から、「薫が宇治に匿まっていた女に、匂宮が密かに通い始め、薫がそれに気付いて警備を厳重にし、女を京に迎えようとしたところ、女は宮を思っていたのである、宇治川に投身して果てた」という噂が伝えられた。その女に仕えていた今参りの下童が、宰相と呼ばれる女房の実家に来て語った確かな事実だという。宇治の浮舟の住処では浮舟の真意——それは本稿で探ろうとするところであるが——を知る者がなく一般にこの様に受け取られていたものと思われる。

下童が、浮舟は匂宮に恋していたと語ったのは、事実その通りであった。浮舟は匂宮が薫をよそおって侵入した最初の出会いの翌朝、次の様に思う。

心ざし深しとはかかるを云うにやあらむと思ひ知るるにも、あやしかりける身かな、誰も、ものの聞えあらば、いかに思きむと、まづかの上の御心を思ひ出できこゆれど……

浮舟は、匂宮の情熱に触れて、男の愛とはこういうものかと初めて知るにつけて、二人の男に見えることになった運命を思い、これが世に知れたらと心を痛めるが、何より先に匂宮の夫人中の君の感情を気がかりに思うというのである。中の君にすまない気持が先立つのは、宮の愛を無意識のうちにせよ、受け容れているからであろう。

「誰も」の中には薫が入っているであろうが、薫に対する罪の意識は実感としては生じていない。「いとをかしくけ近きさまに答へきこえなどしてなびきたるさま」で匂宮に應對し、薫は「いとときよげ」であるが、宮は今一段気品高い美しさで、「きよらなることはこよなくおはしけり」と思う。和歌を書いたり絵を巧みに描いたりする宮に、浮舟は初めてこの様な貴人を見るので夢見心地である。語り手は「若き心地には、思ひも移りぬべし」という。浮舟は、自身の浪漫的性情にぴったり合った人と運命的な邂逅をしたのであった。二日逗留して晩方、宮は妻戸口に浮舟を伴って、和歌を唱和して帰って行く。宮は出でがてにし、彼女も「かぎりなくあはれ」と思う。物語の一情景にヒロインとして登場している様な心地だったのであるうか。数日後薫が来訪した。浮舟は薫に逢うのが恥づかしく思われるが、半面で、薫に逢ったことを後に匂宮が聞いたら何と思うだろうと胸が苦しい。匂宮に心惹かれるのは、「いとあるまじく軽きことぞかし」「そなたになびくべきにはあらずかし」と反省するその下から、宮の姿が幻に浮かぶ。薫が「京に新築している家にあなを迎えたい」と言うと、宮が同じ様なことを云ったのを思い出す。「我ながら心愛の身や」と思いつづける。理性では薫に従うべき身だと知っているのだが、感性がそれについて行けないのである。匂宮と出会った時薫にはすまないと思わなかったのに、薫に逢っていると宮が思い出されて泣いてしまう。匂宮は大雪を犯して、深夜二度目の来訪をした。浮舟は宮の深い情愛に心打たれる。宮は、白い下着のままの浮舟を対岸の隠れ家に半う。寒きは身を刺すばかりで

あるが、有明月が澄み上り、小舟の中で宮に抱かれて渡る道行に、浮舟は興趣を感じる。隠れ家に耽溺の二日を過ごす間に、宮は浮舟の心に染みるような言葉と振舞いの限りを尽くし、互いにいとおいと思う感情がつる。宮は浮舟を連れ出して匿まうことを繰り返すし云い、それまでの間薫に逢わないと約束させようとする。浮舟は答えられない。帰りの舟中で宮が、「あなたの大切なお方（薫）は、こうはあるまい。私の心は『見知りたまひたるや』」と言うと、初心で正直な浮舟は素直に頷くのであった。浮舟の住処では、薫が彼女を京に移す意向を明らかにしたので、乳母を中心に準備が進む。母も喜んで、女房や女童などを廻して来る。浮舟は、それをこそ本筋として始めから待っていたことだと理性では思うのだが、匂宮が忘れられず、その言葉と有様が幻に浮かび、夢枕に屢々宮が現われたりする。対岸で宮と過ごした後、浮舟は激しく宮に傾いてしまった自分をどうすることもできなくなっている。宮の描いてくれた絵を時々取り出して見ると泣けて来る。月が美しいと、小舟の中で見た有明月の空が思い出されて泣いてしまう。いつまでも宮との仲を続けてはいけなさと、強いて考えるのだが、薫を迎え取られ、宮と縁を絶って一生引き籠ってしまえばきぞ切なからうと思う。彼女は宮の移り気を知っていたし、弁の尼が母に「いと騒がしきまで色におはします」と語るのを傍で聞いていたが、胸を痛めるばかりで、宮を忘れることはできない。薫の定めた上京の日が迫る。浮舟は進退を決することができない。

薫はついに秘密を知った。以後、彼女の住処は薫の命令で厳重に

警固せられて、宮は近づくことができない。宮からは、薫が浮舟を京に移すに先立って、彼女を迎えに行くという手紙が届けられる。浮舟は入水を決意しているので今一目宮を見たい。

時の間にてもいかでかここに寄せたてまつらむとする。かひなく恨みて帰たまはんきまなどを思ひやるに、例の、面影離れず、たへず悲しくて、この御文を顔に押し当てて、しばしはつづめども、いといみじく泣きたまふ（浮舟）

宮は、浮舟から返書がないので、焦ら立って逢いに來たが、警固が厳しくて入れない。辛うじて家臣が侍従を連れ出して来る。侍従は、必ず宮に女君を盗み出させる手筈をととのえたと約して帰り、浮舟に宮の有様を報告する。浮舟は一夜泣き明かす。

ありし絵を取り出でて見て、描きたまひし手つき、顔のにはひなどの向ひきこえたらむやうにおぼゆれば、よべ一言をだに聞えずなりにしは、なほ一重まさりていみじと思ふ。（浮舟）

初めて逢った時、匂宮が「心よりほかにえ見さらむほどは、これを見たまへよ」「常にかくてあらばや」と云って与えた絵は、彼女には、宮その人の形代である。先に文殻を焼いた時にも、これだけは手放すことができなかった。その時の宮の手つきと、顔の匂う様な美しさが感覚に迫って、死を前にしている今、一目逢うこともなく恋しきは一層である。宮に返り言を書く。今はの別れである。

からをたにうき世の中にとどめずはいづこをはかと君もうらみむ（浮舟）

薫には何も書き残さなかった。誰にも何ひとつわからないままに身

を終えようと思ったのであった。

浮舟は匂宮にこれほど強く惹かれながら、それを自分自身にさえ最後まで隠し通そうとした観がある。側近の右近や侍従が、宮に心を移したと見るのを嫌った。

「なお、我を宮に心寄せたてまつりたると思ひてこの人々の言ふ、いと恥づかし。心地にはいづれとも思はず、ただ夢のやうにあきれて、いみじく焦られたまふをばなどかくしもとばかり思へど、頼みきこえて年ごろになりぬる人を、今はともて離れむと思はぬによりこそ、かくいみじともと思ひ乱れ」

（浮舟）

匂宮の狂熱的な愛を、どうしてこうまで深く思つて下さるのかと、夢の中の出来事の様な気持でお受けしているが、自分としては、二人の男性のどちらかに多く傾いているのではない。薫と絶えるつもりでないからこそ、こんなに悩んでいるのだ、と彼女は半ばは自分に言う。この内部相克が、匂宮への恋そのものであるのに気づかないのだらうか。浮舟の苦悶を見かねた右近が、匂宮の迎えに行くという消息に、承諾の返事を書くようにと勧めると、浮舟は日頃のおどかさにも似ず、激しい言葉で叱りつける。

「かくのみ言ふこそいと心憂けれ。さもありぬべきことと思ひかけばこそあらめ、あるまじきこととみな思ひとるに、わりなく、かくのみ頼みたるやうにのたまへば、いかなる事をし出でたまはむとするにかなと思ふにつけて、身のいと心憂きなり」

（浮舟）



「宮が、私を薫の迎えに先立つて盗み出そうというのに、私は同意していない。あるまじきことと弁えている。だのに、宮はどんな無暴な行爲に出るつもりなのか。それが案じられるにつけて、我が身の上の拙なさが歎かしいのだ。」という。浮舟は偽りを云っているのではない。しかし、事実を隠している。いや、激しく揺れる本心を、右近にも自分自身にも認めさせまいとして、苦しい言い訳をしているのである。

枕のやうやう浮きぬるを、かつはいかに見るらむとつつまし。

つとめても、あやしからむまみを思へば無期に臥したり（浮舟）  
彼女は、宮を思つて泣くよと、右近や侍従に思われるのを「恥づかし」と思う。匂宮に心を移すのは、「あるまじく軽きこと」「けしからず」「人笑へ」という意識が、絶えず心の底を離れない。実は、その制御は、匂宮との情事のはじめから効力を失っていたのだが、彼女はそれに気付かない。

作者は、浮舟とは対比的な中の君を描き出している。匂宮は、中の君が浮舟の居所を自分には秘密にしていたのを恨めしく思うが、浮舟を見付けて手に入れた今は、あらわにそれを口に出す訳にゆかず、中の君と薫との仲を疑っている様な言い廻しで、真顔で恨み言を云う。中の君は、誰かが事実無根のことを確かな事の様に宮に告げ口したのだらうかと思う。そして、匂宮がその噂を人から聞いたのか、それとも宮が一人きめの邪推をしているだけなのかを確かめないうちは「見えたてまつらむも恥づかし」い気持ちがする。薫にも肌を許し自分にもこの様に身を委すよと、宮に思われるのを、中

の君は「恥づかし」とするのである。中の君は自分をしっかり保っていて、操守についての根本的な矜持については、夫にも侵犯させないものを持っている。浮舟の場合は、二人の男を持ったと知られるのが恥づかしいのである。彼女は、薫に対して、秘密の露頭を恐れるが、匂宮と通じたことを薫に対する罪惡とは感じていない。身の処し方、心の持ち方に、品格に欠ける処があると思われるのが恥づかしいし、薫の怒りを買って漂泊する身の上になるのが心細いのである。匂宮と結ばれた後に薫と逢っていても、「今より添ひたる嘆き加えて」「もの思わし」のみである。宮を恋しながらも薫にも従わざるを得ない身の成行きを歎くのみであった。くり返し、絶えず、「憂き身」と思い続ける情緒的思考こそ彼女独自の受動的貞操観と云えよう。

薫は随身の探索によつて浮舟の秘密を知ったが、彼女を見棄てる気にはならなかった。「歴とした妻妾というのではないのだから見逃がしておこう。」「自分が浮舟を見棄てたら、匂宮が迎え取るだろう。移り気な彼はいつか浮舟に飽き、例によつて女一の宮に出仕させたりするだろう。それでは浮舟がかわいそうだ」と思うので、使に文を持たせてやったのだった。だが、その思いやりは彼女に通じる筈はない。彼女が見たのは、「波こゆるころとも知らず末の松待つらむとのみ思ひけるかな」という辛辣な和歌と「人に笑はせたまふな」という鋭い一言であった。薫は彼女の「おほどか」な外面だけを知っていて、彼女の感じ易い、こわれ易い、何か常におびえている氣質にまでは思い至らなかったであろう。彼女の「児めき」

「若く」「らうたき」可憐美は、内部のこのこわれ易い繊細さと同じ根から生じているのであった。浮舟の巻に見える、彼女の歌を拾い出して見ると、

a たちばなの小鳥の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ (句宮に)

b 降りみだれみぎはにこはる雪よりも中空にてぞ我は消ぬべき (句宮に)

c 里の名をわが身に知れば山城の宇治のわたりぞいとど住みうき (独詠)

d かきくらし晴れせぬ峰の雨雲に浮きて世をふる身ともなきばや (句宮に)

e つれづれと身を知る雨のをやまねば袖さへいとどみかさまりて (薫に)

「憂き」「うき舟」「ゆくえ知られぬ」(以上(a)、「中空にてぞわれは消ぬべき」(b)、「里の名(うし)をわが身に知れば」(c)、「雨雲に浮きて世をふる身」(d)、これには「まじりなば」と詞が続く。「身を知る雨」(e)、と、どの歌にも孤独・憂愁・死の予感・不吉の影などを印象づける美しい言葉が一首の軸になっていて、情緒的な不安感にいつもつきまとわれている傷つきやすい浮舟の気質を感じさせる。浮舟が死を思い立つ動機は、事の起ころぬ以前から彼女の内部に準備されていたと云えよう。

薫の叱責の手紙は彼女をおびえさせた。右近と侍従は「この際一時も早くどちらかに進退を決める様に」と勧めるが、浮舟は態度を

決しかねる。彼女は、自分の都合を主にして去就を定める思考方法にはついて行けない種類の人であった。薫は、浮舟の手紙に返事も寄こさず、莊園に命じて彼女の住む山荘の警備を強化する。浮舟の過敏になっている神経は、警備を支配する内舎人のきびしい申し入れに恐怖心を掻き立てられ、薫の句宮に対する警戒が熾烈になるにつけて変事が起るのではないかと不安である。浮舟は、二人の対立を解決するには、自分を消去するよりほかに方策はないと決意した。

「とてもかくても、一方一方につけて、いとうたてある事は出で来なん。わが身一つの亡くなりなんのみこそめやすからめ。昔は懸想する人のありさまのいづれとなきに思ひわづらひてだにこそ、身を投ぐるためしもありけれ。ながらへば必ずうき事見ぬべき身の、亡くならんは何か惜しかるべき、親もしばしこそ嘆きまどひたまはめ、あまたの子どもあつかひに、おのづから忘れ草摘みてん。ありながらもてそこなひ、人わらへなるさまにてさすらへむは、まさるもの思ひなるべし」(浮舟)

浮舟は、二人の求婚者の間に板挟みになって入水した菟原をとめの物語に、解決の糸口を見出した。彼女は誰にも理解してもらえない孤独の暗闇の中で、古代のをとめの苦衷に、深い感動と共感を覚えたことであろう。薫と句宮のどちらに従っても、外聞の悪い事が起るにちがいない。宮の暴挙を止めさせ、薫の体面を保持するには、自分が死ぬのが一番無難な方法だ。母は、悲嘆にくれるであろうが、生きて我が子が恥を曝しているのを見る方が、更に嘆きが深いだろうと思うと、先立つ申し訳なさも軽くなる。純真なかの古代のをと

めの選んだ道を自分も行こうという思念が、今までくり返しくり返し死を予感しながら実現せず過ぎて来た彼女に、最後の決意を固めさせたのであろう。草子地は

児めきおほどかに、たをたを見ゆれど、氣高う世のありさまをも知る方少なくて生はしたてたる人にしあればすこしおずかるべきことを思ひ寄るなりけむかし。(浮舟)

と、突き放して説明する。浮舟の育ちが、死の決意の要因となつたと云うのである。浮舟の母は彼女を他の実子と別扱いをして(東屋)、宇治の八の宮の姫君として、氣高く、世間知らずに養育したのだった。八の宮が姫君達のために女房達に言い残した訓誡が思い出される。「生れたる家のほど、おきてのままにもてなしたらむなむ、聞き耳にもわが心地にも、過ちなくはおぼゆべき」(椎本)と八の宮はくれぐれも言い残したのであった。母、中将の君はもとより遺誡については知らないであらうが、八の宮が姫達の少女時代に施した教育については日頃見聞きしてたであらう(浮舟一才前後の時、大君八才、中の君六才)。八の宮は、死に臨んで唐突に上の訓誡を言い渡したのではなく、それは姫君達への常日頃からの教育方針でもあったことは推察に難くない。浮舟の母は、浮舟の成育後父宮に引き逢わせようと思っていた(東屋)ので、八の宮の教育方針に倣って、彼女を教育したであらう。弁の尼に對つて、母が「我が子が、もしも、匂宮と深い關係に陥るような事が起こったら、私はどんなに悲しい思いをしても、二度と逢うまい」と、何も知らずに語つたのは、浮舟を親王の姫君としてその家格にふさわしく、

氣高く育て上げたことに對する自負をも、背後に抱いての言葉であつたと考えられる。「恥づかし」は相手の趣味教養の高さに對して自分の有様が氣がひけるという場合に用いるのが當時の普通の用法であつたが、浮舟は、自分の身の処し方や心の持ち方に欠けるところがあると、相手が思わなかつたかと思はれるという意味にかつてゐる。しかも、自分より趣味教養の高くない、召使の女房達に頼用しているのが特色的である。皇族の姫君らしくあらねばならないという意識がいつも働いていたのであろう。氣高く、氣高くと、母が念願した教養を、素直な彼女は東国で育つた幼少時代から一筋に守り通して来たであらう。八宮から庶子としてさえ認知して貰えなかつた浮舟の身分は、常陸前司の養女であり、客觀的には当然受領階層・女房階層に属するのだが、その事には彼女は全く無知であつた。彼女の「若き」「おほどか」な持ち前の資質の中で、都の八の宮の姫らしくあらうという理想は、いつしか、空想的な浪漫的な彼女独自の性格を育て上げて行つたのではなかつたか。亡き八の宮を慕い、中の君にあこがれ、匂宮の誘惑に、抗し切れない「若き心地」と、薰や側近の女房に感じていた「恥づかし」とは、もとは彼女の浪漫性同根から出、事の起ころぬ前には無理なく並存していたのが、薰と匂宮との対立が激化し事態が切迫するにつれて、互いに矛盾し對立し、ついに彼女自身がそれを保ち切れないところにまで至つたのであろう。一方また、右近や侍従の勤める様な、都合のよい方の男性に所屬をきめるというような世俗的な処世法には、ついて行けなかつた。彼女の「氣高く」育てられた感覚は、それに従うこ

とを不可能にした。「児めきおほどかにたをたと見ゆれど、氣高う世のありさまを知る方少なくて生はしたてたる人にしあれば」を、私は以上の様に解釈する。彼女は自己追去の道を選んだ。彼女が東国育ちということも、死の決意の要因として見逃せないことは勿論である。(この草子地は、浮舟創造のキイ・ワードとも受け取れるであろう。浮舟の不幸な出生、地方渡りの国司の妻の連れ子としての東国育ち、母の溺愛とその特異な養育法に培われた浮舟独自の浪漫的氣質、素直な性格、二十才になって初めて上京、上京後の数奇な運命、恋、死という筋書きは、ここから出発し、ここに回帰したと云えるのではなからうか。)

浮舟の入水(したと思わせる書き振りである)の意味は一体何であつたか。彼女の意識では、薫と匂宮との間に板挟みになって、危く匂宮に傾き切ろうとする自分を、ぎりぎりの一線でくい止めたことになっているであろう。しかし、われわれは、彼女が、一度も匂宮を拒否しなかったことを、薫に迎え取られると宮に逢えなくなるのが悲しいと思い悩んでいたことを、匂宮への慕情が自覚を超えて燃え立っていたことを、知っている。だから下童の言葉に見る様な解釈が、浮舟の入水事件に対して流布されていたのは無理もない。しかし、他者がどう解釈しようとも、当の浮舟の心情は、もっと繊細な、純真な、自己犠牲的のものであつた。凡俗のぞんざいな推論で汚すには惜しいものであつた。それは、浮舟がその孤独な夢多い心の奥に培っていた心情という、特殊な風土の所産であつた。この風土の性質が理解されない限り、彼女の入水決意の動機はわからな

いであろう。

# ○

浮舟を争った二人は、彼女の失踪後どうなったか。中陰が済んで、みなが日常生活に戻った後の匂宮と薫との状態が、蜻蛉の巻後半くり展げられる。それを、浮舟の巻との対応関係を見ながら取り上げて見ようと思う。薫と匂宮とを対比しながら描いてあるが、便宜上別けて取り扱う。物語の舞台は、壮麗優雅な六条院に移る。ここには、明石中宮が叔父式部卿宮の服喪のために、女一の宮を伴って滞在している。

匂宮は浮舟が最後に贈った和歌から、その切迫した告別の情を汲み取ることができず、情趣的な詠嘆として理解した。従つて、彼女がどういう心持で死を選んだのかは勿論のこと、宮をだけ慕つていた心情も、わかつていなかったと思われる。しかし、浮舟を失った当時は、傷心の余り、命が危ぶまれる状態に陥つた。今は癒えて、女一の宮の許に慰めどころを求めて出入している。女一の宮には、出自・容姿・教養・才気のどの点から見てもそれぞれ遜色のない女房が大勢出仕している。それらがみな匂宮をもてはやす中で、小宰相だけは薫に好意を寄せていて、匂宮が二人の中に水をさす様なことを云つて誘惑しても取り合わない。浮舟と対照的である。

母明石の中宮は、女一の宮の女房大納言の君から、匂宮が薫の愛人に密通し、女が入水するに至つたことを、匂宮の非行として聞か

された。宮は浮舟の恋しさに、侍従を召し出して、母中宮に出させ、傍ら、浮舟を偲ぶ語らい人にする。侍従は浮舟に仕えていた頃、同僚の右近に勾宮を評して「うち乱れたまへる愛敬よ。まらなれば……えかくてあらじ、後の宮にも参りて、常に見たてまつりてむ」（浮舟）と語ったことがある。この度宮の召し出して、及びもつかなかったあこがれが実ったのであった。

その秋、故式部卿宮の姫君が、継母の圧迫の手を逃れて女一の宮に出仕し、「宮の君」と呼ばれる身となった。親王の遺児、寄る辺なき身の上、というのが、浮舟を連想させる。勾宮はこの薄倖の姫君に心を奪われて、すっかり元通りのすき心に戻ってしまった。浮舟が生きていてもこの様な日は来たかも知れない。宮にとって今必要なのは宮の君である。

薫はどうか。浮舟の四十九日が済んだ頃のしめやかな夕暮、小宰相の君からも同情の和歌を贈って来た。薫はこの人と、以前から密かに情を交わしていたのであった。すぐれた女房の揃っている女一の宮の御殿でも、彼女は一きわ目立つ佳人であった。女房連中が、みな勾宮をもてはやす中で、ひとり毅然とした態度を保つ彼女に薫は心を惹かれていた。小宰相は六条院滞在中の女一の宮に付き添って、局をたまわって逗留している。薫は和歌を贈ってくれたのに謝意を表すために彼女の局を訪れる。「見し人よりもこれは心にくき氣添ひてもあるかな」と思い、宮仕えさせておくのは気の毒だ、自分がどこかに隠し据えておきたいものだという気が起くる。が、言葉には出さない。「まめ人」である薫は、小宰相が、琴も巧み、琵琶

も巧みで、手紙書いても物を言っても床しい趣向を見せるので、浮舟よりも素晴らしいと感じる。「児めき」「おほどか」で「たをた」と見ゆる」浮舟の女としての良さを、「すきもの」の勾宮をあれ程夢中にさせた浮舟の可憐美、「どうして薫はあの人を、そんなに永く放置しておくことが出来るのだろう」と、宮に憤りをさえ感じさせた浮舟の「らうたさ」を、堅物の薫は正當に評価し享受することが出来ないのである。

蓮の花の盛りの頃、薫はゆくりなく女一の宮を垣間見る機会を得た。女房達に取りまかれて、白い薄ものを着て美しい手に氷を持ち、微笑を浮かべて立っている宮の美貌を、彼は魂を奪われる思いで見入った。翌日、薫は自邸で、正夫人女二の宮に、昨日の女一の宮と同じ衣裳を調進して着せ、手に氷を持たせて眺める。心の中に、漢の武帝が亡き李夫人の恋しさに、その絵姿を描かせて甘泉殿に掲げた故事を想って感興を覚えるが、姉妹ではあっても生母が異なるせいか似ていないのに失望する。女一の宮にこそ似ていないが、女二の宮は今が盛りの美貌であるのに、彼は心が慰まない。薫は又しても形代を作る。しかも正夫人をその姉宮の形代に仕立てる。浮舟に対していても、心の中では大君と似ているところを探し、大君の思い出を再現しようとして、浮舟その人を愛することなしに思い沈んでいた彼が連想される。浮舟の死に遭って、自分の怠りを反省し後悔したのだが、その後悔は、最も根本的な過失、浮舟を形代扱いにしたことを反省するところまでは至らなかった。若い女を淋しい山里に放置したことだけを、浮舟にすまなかったと思ったのであ

った。彼はすこしも變つていない。浮舟に詫びることで、彼は当然  
 變らなければならなかったのに。翌日薫は、中宮に、女一の宮の御  
 文を、女二の宮に賜う様にと懇請しておいて、女一の宮の滞在し  
 ている西の対に行く。垣間見をした思い出をなつかしむ心持と、小宰  
 相に逢えるだろうかという期待からである。女一の宮は入れ違いに  
 中宮の許に来ていた。宮のお伴をして来た大納言の君が、薫と小宰  
 相との優雅な交情の様子を中宮の耳に入れ、話のついでに、「薫の  
 匿まっていた、匂宮の夫人の異母妹に、「匂宮が密かに通うことが  
 あった。薫が気付いて女を京に迎え取ろうとして警固を厳しくした  
 ので、宮は入ることもならず空しく帰京するという状態に立ち至つ  
 た。女は宮を慕っていたのか、俄かに消え失せた。入水したのであ  
 ろうと、女の乳母など側近の者は泣き感ったという話を聞いた。」と  
 中宮に告げた。中宮は、薫からは、浮舟の死については、世が無常  
 であること、八の宮の一族がみな短命なことを悲しそうに語るのを  
 聞いただけであつた。薫は匂宮の密通と浮舟の入水とはわざと伏せ  
 て語らなかつたのであつた。匂宮の母でありわが姉である中宮に、  
 恥ずかしい思いをさせるのを憚ると同時に、醜聞が広まるのを防い  
 だのである。だが、大納言の君のおしゃべりで、中宮は事件を知つ  
 た。一座にいた女一の宮も両方の女房達も、聞いていたであろう。  
 大納言が語つたところは、浮舟の心事に関する以外は、ほぼ事実通  
 りであつた。しかし、われわれが上に見たところでは、この事件は  
 浮舟の心情の清さとやさしさとを抜きにしては理解しようもない性  
 質のものであつた。それを抜きにしては、忌まわしい色恋沙汰の果

ての、女の奇怪な横死事件となつて、われわれが浮舟の巻で見たも  
 のとは全く異質の、醜怪な話に成り下つてしまふのだ。大納言の話  
 には、薫の大君追慕、匂宮の青春の情熱、浮舟の自己犠牲など、事  
 件を構成していたそうした美的要素は一切含まれていなかった。

浮舟は、死後自分の真意がわかつてもらえず、悪し様に噂される  
 のを気づかつて、「なげきわび身をは棄つとも亡き影にうき名流さ  
 むことをこそ思へ」と詠んだ。その悪い予感のは的中した。所もあろ  
 うに、彼女の想像もしなかつた中宮の御前で、彼女の最も氣にして  
 いた父八の宮と母の名を汚し、自分も悪い噂を立てられる事態が起  
 きたのであつた。

女一の宮の手紙が、数日後、女二の宮の許に届けられた。宮はそ  
 の筆蹟の美しいのを見て嬉しく思う。女一の宮に絵を集めて差上げ  
 るに当つて、恋歌を添えたいと思うが、帝と中宮の大切にしていら  
 れる内親王に、叔父の自分が懸想しているなどと、世の噂になるの  
 を憚つて、せっかく詠んだ歌をそのまま置いてしまふ。今は苦心し  
 て手に入れた宮の文も空しい氣がして、薫は思い悩む。それにつれ  
 て、宇治の大君さえ存命であれば、自分は女一の宮に恋することも  
 なかつたと、大君の追懐となり、再転して中の君への思慕を燃やす。  
 次いで浮舟が思い出され

いと心幼く、とどこほるところなかりける軽々しさをば思ひな  
 がら、さすがにいみじと、ものを思ひ入りけんほど、わが心例  
 ならずと、心の鬼に嘆き沈みてゐたりけんありさまを聞きたま  
 ひしも、思ひ出られつつ、重りかなる方ならで、ただ心やすく



らうたき語らひ人にてあらせむ、と思ひしには、いとらうたかりし人を。思ひもていけば、宮をも思ひきこえじ、女をもうしと思はじ、ただわがありさまの世づかぬ怠りぞなど、ながめ入りたまふ時々多かり。

薫は、浮舟の匂宮との情事と、その果ての入水を怒りをこめて「とどこほるところなかりける軽々しさ」と決めつける。奔放たというのである。薫は、浮舟がほしいままに匂宮と通じ、自分の迎え取りを拒否するために入水したのだと、今も思い込んでゐる。それは、上に見た下重らの卑しい解釈と異なる所がない。われわれの見て来たところでは、真相はそうではなかった。彼女は無垢な内攻的な、純情の人であつた。彼は浮舟その人を見ず、大君を再現する人形を眺めた。だから今も浮舟がわからないのである。彼女は匂宮に深く心を寄せながら、薫への誠意を守つて宮に奔らなかつた。死を以つて、彼の最も大切にしている体面を守つてくれた。それが薫に通じないのである。彼女が内心の死闘のために瘦せるまで苦悩していたのも、良心の苛責と安易に解釈している。浮舟は薫に対して終始罪の意識は持つていなかった。彼女は自分の身分を、八の宮の遺児として考へていたものと思われる。宇治の山荘は彼女には亡き父の邸と映つていたのであろう。薫が修理して今では彼の所有となつてゐることを、誰からも教えられていなかったのではなからうか。彼女は、自分の身分を中の君の許しを得て故父宮の旧邸に留まつてゐる身の上とくらひに漠然と考へていたのであろう。薫の囲いものになつてゐることに気づいていなかったことは、新年に申の君の若宮に卯榎を届け

たことから十分推察出来る。だから匂宮との関係が密通にあたるとは思ひも及ばなかつたであらう。「世のありさまを知る方少なくて生ほしたてたる人」としてはさもありそうなことである。浮舟が薫を「かの心のどかなるさまにて見むと、行く末遠かるべきことをのたまひわたる人」と、匂宮と同程度に考へていて、夫と思つていなかったことでもそれは立証できるであらう。浮舟の苦悩は薫の想像する様な低次元のものではなかつた。そののみか、彼が浮舟を壓とした妾として扱わず「重りかなる方ならで、ただ心やすくらうたき語らひ人にてあらせむ」という程度に彼女を考へていたことが明かになつた。それでは、上に見て来た浮舟の意識とあまりにも隔たりがあつて、彼女が不憫である。薫には、この処遇を冷酷であつたと反省する気色はない。自分の一方的な思ひ上がつた姿勢をそのままにして「女をもうしと思はじ」「ただわがありさまの世づかぬ怠りぞ」と思う。それではただ、「軽い身分の女のしたことだ、放置した自分も悪いのだから許してやろう」というだけのことではないか。彼は、浮舟の死について、自分に本質的な落度があつたのではないかと、もう一段深いところで反省するべきであつた。自分の自己中心的な考え方。帝の御智という身分意識・自然感情を抑圧した身構え・大君を求める想念、それらを浮舟との間に介在させて、彼女を正當に理解し待遇することのなかつた過失に思ひ至るべきであつた。許しを乞うのは自分の方であると知るべきであつた。彼は浮舟を愛していた。今も、裏切られた憤りを抱きながらも愛し続け、その死を歎いてゐる。それなのにどうして裸の心で彼女を追懷しよ



うとしないのであろうか。

秋になって、故式部卿の宮の姫君が、女一の宮に出仕した。父宮が在世中には、春宮妃にと考えたり、薫を聲にと考えたりもしていたのに、俄かに衰運に遭つて宮仕をする身となつた。薫はこの姫君に同情するが、宮仕えも人じみて、親王の姫という誇を失いかけて来るのを見るにつけ、浮舟が入水したことも咎めるべきでないと考え直す。薫は、浮舟が、匂宮に迎え取られてやがて飽きられ、今まで幾度も見て来た実例通り、女一の宮に仕えさせられる道を辿らなかつたのは、自分のためにも彼女自身のためにも、まだしも良かったと、彼女を許す気になり、自らも慰めを見出すのであつた。

○

浮舟の死因は周囲の誰にも遂に理解せられずしまいになつた。そればかりではない。匂宮には半年も経たない中に、彼女への愛の思ひ出すら既に遠い過去の世界のものになっている。薫は、彼女を忘れるはしない。しかし、彼は浮舟の内面について何を知っているのだろうか。薫の宮達の恋にも充たされぬ思念は永遠の恋人大君に帰って行く。大君を追慕し中の君を恋しく思うにつけて浮舟を思い浮べ、形代をさえ夫つた虚脱感の中で、

ありと見て手にはとられず見ればまたゆくへも知らず消えしか  
げらふ

と詠む。浮舟の可憐な人生・あこがれ・恋・自己犠牲の真相——そ

の中のどの一つをも薫は知らない。薫にだけでなく、「誰にもおぼつかなくて」その真意を知られないで彼女は消えて行つた。

「ゆくへもしらず消えしかげらふあるかなきかの」薫の歎きとは全く別の深い感動をこの一句にこめて作者は浮舟の人となりとその生涯を悼んでいるのであろうと私は思う。浮舟の巻の終りで入水決意という頂点にまで高まつた浮舟の物語は、こうして蜻蛉の巻末のこのことばで完結するのである。

注1 玉上琢弥博士著「源氏物語評釈」巻十二、一六五頁

(本学教授)